Series 2. Polyphyllatae Bonati (1921)——series Polyphyllae Maxim. (1888) sensu stricto.——series Microphyllae Prain (1890) pr. part., quoad *P. polyphylla* et *P. gruina*.

Series 3. Oliganthae Prain

Subsect. 2. Brevitubae (Prain) Hurusawa comb. nov.——sect. Siphonanthae B. Brevitubae Prain

Series 1. Macranthae Prain

Corollae tubo brevissimo rostroque galeae porrecto saepius tenue, in speciebus aliquot, circinato gregem Tenuirostres sectionis Orthorhyncharum in mentem vocant.

Typus: *Pedicularis Klotzschii* Hurusawa nom. nov.——*P. macrantha* Klotzsch in Bot. Ergeb. Waldm. Reise, p. 108 (1862), non Sprengel Syst. Veg. IV-2 : 233 (1827)——*P. ochroleuca* Duthie in Maxim. (1888), non Schlose in Reichb. Icon. Fl. Germ. 20: 71. t. 1755 (1862)

Series 2. Robustae Prain

Tubo corollae paulum elongato paullatim ex hac sectione abeuntes inque sectionem Siphonanthas transeunt. Plantae pumilae (praeter *P. Garckeana*), scapo inflorescentiae breviusculo excepto caulibus foliatis subnullis, foliis inter sese juxta alternis e basi subcaespitosis saepe longe petiolatis.

Emendanda: **P. Ishidoyana** Koidzumi et Ohwi in Act. Phytotax. Geobot. 6: 291 (1937)——*P. Artselaeri* Maxim. var. *koraiensis* Hurusawa in Jour. Jap. Bot. 22-5-6: 71 (1948).

○禾本三題話 (久内清孝)

1) 昭和23年9月2日千葉行省線電車の破窓から，錦糸町新小岩間の沿線に見なれない禾本が花ざかりなので，途中下車して見たら，ワセヲバナであつた。都心に最も近いのは錦糸町驛構内及び其附近である。都内にこの草の生えて居るのは今迄知らなかつた。いま迄私は湘南方面迄採集に行つたものである。こゝに記錄するものが果して自生していたものか，それとも線路工事のとき運ばれて來たものか不明である。しかし，この邊の沿海地域にあつても當然なことだから．分布の資料としても大したズレでもあるまい。學名は從來のものは使いたくないが，さればとてどんな學名を使つてよいか，おいそれと考も浮ばないから省略して和名丈にする。

2) マコモ (*Zizania latifolia* Turcz.) の花について，必要があつて調べていたところ，意外なことに A. S. Hitchcock 氏の Manual of the Grasses of the United States (1935) p. 540 に "palea about as long as the glume" なる記事に氣付いた。これが

間違つていることは，マコモの花を見た人なら何人にもわかることで，著者の如き禾本の大家がこんな間違をする筈は全くない。それ故これは誤記に過ぎない。されば The Genera of the Grasses of the United States (1936) p. 214 には "palea about as long as the lemma" となつて居る。誤植だらけの日本の刊行物なら，こんなことは尋常の茶飯事だが，この本の様な立派な本としては珍らしいことで，たしかに話題とするに足りるので一應記しておくことにした。

3) セイコノヨシ (*Phragmites Karka* Trin.) はヨシと同様に分枝しないものと思つて居たら，千葉縣津田沼町藤崎にあるものは，明瞭に分枝するので，こんなこともあるのかと思つて居る。これは 3 年間見て居るので，1 年丈の思いつきではない。標本は科學博物館におく。勿論種が異るなどとは全く思はれない。

○日本植物に關する最近の外國文獻 (5) （原　寛）

1947 年度に發表された文獻の中前回に解說しなかつたものを紹介する。

Lindquist 博士は On the variation in Scandinavian *Betula verrucosa* Ehrh. with some notes on the *Betula* Series Verrucosae Sukacz. と題し Svensk Bot. Tidskr. 41: 45-80, fig. 1-12 (1947) でシラカンバ類を再檢討し，殊に歐洲產の *B. verrucosa* に就てその變異の分析，分布等に關し詳細な硏究を發表した。その結果歐洲のものは 2 變種に區別され，スカンヂナビア北部，フインランド等北方に分布して居るものを var. *lapponica* Lindq. とし，スエーデン中南部から歐洲中西部，歐露に廣く分布して居るものを var. *saxatilis* Lindq. とした。これに關聯してアジアのシラカンバ類に就ての見解を述べて居るが，その中で注目すべきは次の二點である。先づバイカル，ヤクーツク地方の *B. platyphylla* Sukacz. は葉下面脈腋が全く無毛で腺點が少い事其他多くの點で *B. verrucosa* var. *lapponica* に近緣であつて中間形も見られるので *B. verrucosa* var. *pl typhylla* (Sukacz.) Lindq. と改むべきであると考へた，次に東亞には葉が卵狀三角形で單又は重複鋸歯を有し葉下面特に脈腋と花梗に毛があり，枝や葉には多數の腺點がある一群があり，支那（南西部→東部），滿洲，日本，カムチヤツカ，アラスカ，カナダ北西部に分布して居る。若しこの群を，可成り廣い範圍で變化はするが，一種として扱ふとすれば，*B. japonica* Sieb. の名は規約上用ひられないので．アラスカから記載された *B. kenaica* Evans (1899) が起用さるべきであるとして居る。この基本形はエゾノシラカンバ var. *kamtschatica* Regel と同一であるとし，他の東亞の形は *B. kenaica* var. *japonica* (Miq.) Lindq. (p. 75) 及び var. *szechuanica* (Schneid.) Lindq. となる。var. *mandshurica* Regel は資料がないから記さないとしてある。併し我がシラカンバと *B. kenaica* との關係は更に檢討する必要がある樣に私は思ふ。北米の東部には他から孤立した分布をして更に 2 種のシラカンバ類がある。

Copeland 博士の Genera Filicum (1947) は Verdoorn 博士編輯の Annales Cryptog.